ARTS COUNCIL TOKYO

PRESS RELEASE

2026年7月23日（木）
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー
「だれもが文化でつながる国際会議2026」

ーカンファレンスの登壇者情報やネットワーキング・展示プログラムを一部公開ー

Design: Higuchi Maiko, Typeface“Clementite”: François Dey / Silly Type Foundry

「だれもが文化でつながる国際会議2026」

カンファレンスの登壇者情報やネットワーキング・展示プログラムを一部公開

「だれもが文化でつながる会議」は、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京（以下、アーツカウンシル東京）が取り組む「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の一環として、2022年から行われてきました。5年目となる2026年のテーマは**「Moving Together　ともに生きる文化」**。これまでの歩みを振り返りながら、一人ひとりがよりよく生きるために芸術文化になにができるのかを考え、これからの共生社会のあり方とウェルビーイングの姿を探求します。

本リリースでは、6月に発表した開催概要に続き、会議を構成する３つのプログラム（「カンファレンス」「ネットワーキング」「展示」）の概要とカンファレンス登壇者等について発表します。本会議では、カンファレンスで語られるテーマがネットワーキングや展示とも連動し、ひとつの問いをさまざまな角度から掘り下げていきます。来場者は、聴く、話す、参加する、観るなど、自分に合った関わり方を通じて多様な価値観に触れながら、“自分なりのウェルビーイング”について探求することができます。

キックオフ企画「マルチスピーシーズ」 Vol.2、Vol.3 詳細発表

10月28日（水）からはじまる本会議に先立ち、8月、9月にキックオフ企画を開催します。海、山、大地と「ともに生きる文化」をテーマとするアーティストや研究者が、日頃考えていること、感じていることを語ります。これからのウェルビーイングを考えるための前提が広がる経験則や知見を、本会議に引き継ぎます。

Vol.1（8月3日(月)）の写真家・石川直樹に続き、8月20日（木）に開催するVol.2は、フィールドワークを通して捕鯨、漁労、海の民俗文化について探求し、刺繍や造形作品を制作するアーティストの是恒さくら、9月3日（木）に開催するVol.3は、20世紀の食と農の歴史や思想について研究し、『分解の哲学―腐敗と発酵をめぐる思考―』（青土社,2019年刊行）で第41回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）を受賞した歴史学者の藤原辰史を迎えます。参加申し込みについては、公式ウェブサイトをご覧ください。

開催概要

事業名	：	クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー だれもが文化でつながる国際会議2026 （略称：「だれもが文化でつながる国際会議2026」）
開催期間	：	2026年10月28日（水）～ 11月1日（日）
開催場所	：	東京国際フォーラム （東京都千代田区丸の内３丁目５-１） 10月28日（水）～ 11月1日（日） ：ロビーギャラリー 10月30日（金）～ 11月1日（日） ：ホールB5、ホールD5
主催	：	東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
参加費	：	無料（要申込み）※8月下旬から受付開始予定です。
使用言語	：	日本語、英語、日本手話、国際手話　※同時通訳、字幕あり（国際手話はホールB5のみ）
公式ウェブサイト	：	https://creativewell.rekibun.or.jp/creativewell-conference/2026.html

2026年のテーマに込められたメッセージ

「Moving Together　ともに生きる文化」について

2026年のテーマとなる「Moving Together　ともに生きる文化」。
本会議では、「ウェルビーイング」を単なる個人の幸せや健康にとどまらない、この社会に浸透していくべき「文化」として捉えます。
それは、一人ひとりが自分らしくクリエイティブに生きることと、人間以外の存在も含めた他者とともに生きることを切り離さない考え方です。

「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」ではこれまで“芸術表現”とされてきたもののみならず、人々の日常生活のなかにある創意工夫や能動的な行為も、広い意味での芸術文化＝アートとして捉えてきました。誰かと出会い、言葉を交わし、ともに考え、動き、表現すること。そうした営みを通じて、わたしたちは自分自身のあり方を見つめ直すと同時に、他者や社会との関係を結び直していくことができます。「ともに生きる文化」とは、あらかじめ用意された正解に向かうものでも、個人の内側だけで達成されるものでもありません。一人ひとりの能動性と、芸術文化を通じて生まれる他者との関係性のなかで、互いに影響し合いながら育まれていくものです。

またテーマに掲げている「Moving Together」は、そのようなウェルビーイングを育むための具体的なアクションのことを示しています。“ともに動く”“協働する”、そしてコミュニティや社会を動かしていくこと。本会議では、芸術文化を通じて「Moving Together」を体現してきたスピーカーやアーティストが集い、それぞれの実践や作品、対話を通じて、これからの「ウェルビーイング」のあり方を考えます。

自然界と対話し活動を展開するアーティストや研究者が、日頃考えていること、感じていることを語る「キックオフ企画」を開催

キックオフ企画「マルチスピーシーズ」（全3回）

写真：国際芸術祭「あいち2025」 展示風景
是恒さくら《白華のあと、私たちのあしもとに眠る鯨を呼び覚ます》2025
© 国際芸術祭「あいち」組織委員会
撮影：ToLoLo studio

10月28日（水）からはじまる本会議に先立ち、8月、9月にキックオフ企画を開催します。海、山、大地とともに生きる文化をテーマとするアーティストや研究者が、日頃考えていること、感じていることを語ります。これからのウェルビーイングを考えるための前提が広がる経験則や知見を、本会議に引き継ぎます。

なお、Vol.1は写真家・石川直樹を迎え、8月3日（月）に自由学園明日館にて開催します（7月13日（月）から申込み受付中、先着順）。

※マルチスピーシーズ（Multispecies）…人間のみならず、動物、植物、菌類などあらゆる種（species）が絡まり合って世界をつくり上げているという見方

Vol.2登壇者　：　是恒さくら（アーティスト、秋田公立美術大学アーツ＆ルーツ専攻・助手）
日時　：　2026年8月20日（木）18:00～20:00
会場　：　自由学園明日館 食堂（東京都豊島区西池袋2丁目31-3）
定員　：　30名（要申込み・先着順）
参加費　：　無料
申込方法　：　7月30日（木）14:00 より、公式ウェブサイトにて受付開始
使用言語　：　日本語　※日本手話通訳、字幕あり

【登壇者プロフィール】
アラスカ大学フェアバンクス校でネイティブ・アート、絵画、彫刻を学んだのち、東北芸術工科大学大学院で地域デザイン領域を修了。2022～23年に文化庁新進芸術家海外研修制度によりノルウェーに滞在。鯨類と人とのかかわりや海の民俗文化に関心を寄せ、世界各地でのフィールドワークをもとに、執筆と刺繍作品の制作を行っている。海をめぐる人々の記憶や語りをすくい上げ、糸と言葉で編み直す試みを続けている。近著に『ありふれたくじら』（ELVIS PRESS、2025年）、近年の参加展に国際芸術祭「あいち2025」などがある。

Vol.3登壇者　：　藤原辰史（歴史学者、京都大学人文科学研究所教授）
日時　：　2026年9月3日（木）18:00～20:00
会場　：　SCC千駄ヶ谷コミュニティセンター サークルホール（東京都渋谷区神宮前1丁目1-10）
定員　：　30名（要申込み・先着順）
参加費　：　無料
申込方法　：　8月10日（月）14:00 より、公式ウェブサイトにて受付開始
使用言語　：　日本語　※日本手話通訳、字幕あり

【登壇者プロフィール】
2003年に京都大学人文科学研究所助手に着任して以来、東京大学などを経て、食と農をめぐる歴史研究に携わってきた。人が食べ、育て、分解されていく営みを、近代の歴史のなかで問い直している。『ナチスのキッチン』（共和国、2016年）で河合隼雄学芸賞、『給食の歴史』（岩波新書、2018年）で辻静雄食文化賞、『分解の哲学』（青土社、2019年）でサントリー学芸賞を受賞。研究全般に対して日本学術振興会賞、井上靖記念文化賞も受けている。主な著作に『植物考』（生きのびるブックス、2022年）、『生類の思想』（かたばみ書房、2025年）などがある。

各界で活躍するアーティストや実践者、研究者とともにウェルビーイングを捉え直す、全5セッション

カンファレンス

各界を代表するアーティスト、実践者、研究者など多彩な登壇者をお招きし、参加者とともにウェルビーイングを捉え直す、全5セッションを開催します。3日間にわたるカンファレンスでモデレーターを務めるのは、アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］で多数の企画をキュレーションしてきた、堀内奈穂子とロジャー・マクドナルド。国際的なアートシーンや東京都の文化政策に長年の知見がある2人が5つのセッションに伴走し、各回で交わされる先鋭的な対話のバトンを、次の登壇者や参加者へとつなぎます。クロージングセッションでは、それまでの回でなされた議論とアイデアを包括し、これからのウェルビーイングを生み出す芸術文化の役割を、東京から発信します。

【プロローグ】10月30日（金）18:30～19:00

「だれもが文化でつながる会議」は、2022年から芸術文化とウェルビーイングの関係を考えてきました。
プロローグでは、これまでの議論を振り返りながら、2026年のテーマ「Moving Together　ともに生きる文化」へとつながる背景を紹介します。初めて参加する方にとっても、3日間のカンファレンスをより理解しやすくする導入として、５つのセッションにつなぎます。

【オープニングセッション】「芸術文化がつむぐ明日」10月30日（金）19:00～21:00

複雑で変化し続けるいま、ウェルビーイングは個人の内側に閉じるのではなく、他者や環境、そしてより長い時間のなかで捉え直されつつあります。人間中心にとどまらない眼差し（マルチスピーシーズ）で、場をひらき、自然や都市と人間生活との間で実践や研究を重ねる登壇者が、これからの時代の芸術文化のありようを問いかけます。

鴻池朋子
Konoike Tomoko
アーティスト

小山田 徹
Koyamada Toru
芸術家、
京都市立芸術大学 学長

斉藤百合子
Saito Yuriko
哲学者、
ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン名誉教授

【セッション1】「しなやかな共助」10月31日（土）10:00～12:00

天災や不測の事故で、慣れ親しんだ場所やあたりまえの状況が一変し、その環境に身を置かざるをえないとき。人と人とのコミュニケーションやケアのあり方を問い直すとき。目の前の状況を気鋭のアーティストや研究者たちはどのように読み解き、これまでとは違う関係性を編んでいくのか。しなやかな共助から生まれた事例から、ともに生きる文化のあり方を探ります。

森下 有
Morishita Yu
研究教育者、東京大学
生産技術研究所特任准教授

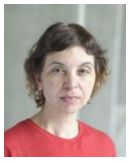
瀬尾夏美
Seo Natsumi
アーティスト、作家

撮影：Hiroshi Ikeda

クリスティン・ウォン・ヤップ
Christine Wong Yap
ビジュアルアーティスト、
社会実践者

【セッション2】「アイデンティティと文化」10月31日（土）15:30～17:30

わたしたちの社会では、文化や歴史、身体、土地、周囲とのかかわりなど、多様な要素のなかで「わたし」をかたちづくっています。
しかし社会の「あたりまえ」は、ときに誰かを沈黙させ、文化やルーツを見えなくしてしまうことがあります。当事者として創造的・学術的な実践を続けてきた識者と、ともに生きることに潜む困難や緊張、そして対話や表現の可能性を考えます。



ジュマナ・エミル・アブード
Jumana Emil Abboud
ビジュアルアーティスト

撮影：岩根愛

北原モコットゥナシ
Kitahara Mokottunas
北海道大学アイヌ・
先住民研究センター教授

松崎 丈
Matsuzaki Jo
宮城教育大学教育学部
特別支援教育専攻教授

【セッション3】「Moving Together　夢とともに生きる」11月1日（日）10:00～12:00

社会や文化、時代の情勢は、ときに「わたし」の自由や尊厳を阻もうとしますが、それでも人は、希望を見出し、生きる道を模索することができます。異なる土地や境遇のなかで創造と実践を積み重ねてきた登壇者たちは、夢を抱きながらそれぞれの経験と想像力を他者へと手渡してきました。「わたし」の夢が他者の夢へとつながった一連の事例を通して、人の尊厳について語ります。

サンギータ・ジョギ
Sangita Jogi
アーティスト

小林エリカ
Kobayashi Erika
作家、アーティスト

西 加奈子
Nishi Kanako
作家、アーティスト

撮影：若木信吾

ギータ・ヴォルフ
Gita Wolf
作家、タラブックス創設者

【クロージングセッション】「クリエイティブ・ウェルビーイング　ともに生きる文化」11月1日（日）15:30〜18:00

複雑で変化し続ける社会に対し、芸術文化のはたらきが生む「クリエイティブ・ウェルビーイング」を東京から発信します。マルチスピーシーズな世界認識に始まり、共助、アイデンティティ、尊厳の観点へと展開した議論を、アートや文化政策に精通した登壇者が受けとめ、ここまでセッションに伴走してきたモデレーターも参加し、未来に向けて提言します。

青柳正規
Aoyagi Masanori
アーツカウンシル東京機構長、
多摩美術大学理事長

撮影：Itaru Hirama

小池一子
Koike Kazuko
クリエイティブ・ディレクター

撮影：Taishi Hirokawa

宮島達男
Miyajima Tatsuo
現代美術家

写真：LISSON GALLERY MILANO

ジャスティーン・サイモンズ
Justine Simons
ロンドン市 文化・クリエイティブ産業担当副市長

撮影：Rankin

堀内奈穂子
Horiuchi Naoko
［AIT/エイト］キュレーター、「dear Me」プロジェクトディレクター、保育士

ロジャー・マクドナルド
Roger McDonald
［AIT/エイト］キュレーター、美術史家

撮影：Sayaka Takizawa

パフォーマンスやワークショップなどのプログラムを通して、参加者と登壇者が交流を図り、身体性を伴った理解を促す場

スタジオ（ネットワーキング）

10月30日（金）から11月1日（日）の3日間、ホールD5では、トーク、パフォーマンス、ワークショップなどを通じて、参加者と登壇者がともに交流しながら語り合います。
東京2025デフリンピックの文化プログラムとして上演された舞台『黙るな 動け 呼吸しろ』を振り返るトークをはじめ、サンギータ・ジョギによる絵本『わたしは なれる』をテーマにしたフラッグをつくるワークショップや、ろう者と聴者の身体性を問い直すレクチャーパフォーマンス『聴者を演じるということ 序論』など、カンファレンスのテーマとも連動したプログラムを実施。作品や言葉に触れるだけでなく、声や身体、他者との応答を通じて「ともに生きる文化」を体感します。

オープンミーティング　ろう者と聴者の遭遇、そこから生まれたもの
日時：10月30日（金）12:00〜15:00、 16:00〜17:30 （2セッションを予定）
登壇者：長島確、牧原依里、松﨑丈ほか『黙るな 動け 呼吸しろ』創作メンバー

ろう者と聴者、異なる言語や文化をもつ人々が、理解を急がず、時間をかけて出会い、向き合うなかで何が生まれるのか。東京2025デフリンピックの文化プログラムとして制作・上演された『黙るな 動け 呼吸しろ』は、ろう文化への社会的認知を高め、ろう者と聴者の相互理解を深めることを目指した作品です。

本プログラムでは、同作の制作メンバーが再び集い、協働のプロセスで直面した困難や、そこから見えてきた発見について語ります。『黙るな 動け 呼吸しろ』の創作から約一年が経ち、それぞれの場所で動き出している実践や問いを共有します。

ワークショップ わたしの「わたしは なれる」の旗をつくる
日時：10月31日（土） 13:00〜15:00
アーティスト：サンギータ・ジョギ、小林エリカ

インドのアーティスト、サンギータ・ジョギによる絵本『わたしは なれる』 は、しなやかな想像力と、厳しい現実に対する抵抗のメッセージを込めた作品です。幼くして結婚し、家事や労働に追われる日々のなかで、ジョギは「なりたいようになれる」未来の女性たちの姿を、自由への願いを込めて描き出しました。

本プログラムは、インドで生まれ、海をわたってきたタラブックスの絵本『わたしは なれる』のことばをもとに、参加者それぞれの「わたしは なれる」を絵に描き、一緒に旗をつくるワークショップです。本書に描かれている夢は、その場にいる人々とどのように響き合うのか。「わたし」から「わたしたち」への旅を、作者・翻訳者とともに体験します。

書影：サンギータ・ジョギ『わたしは なれる』（green seed books, 2025年刊行）

レクチャーパフォーマンス 『聴者を演じるということ 序論』
日時：2回公演 （1回目：10月31日（土）18:00〜19:00、2回目：11月1日（日）14:00〜15:00）
演出：牧原依里　出演：數見陽子、山田真樹

映画『LISTEN リッスン』などで知られる、ろうの映画作家・演出家である牧原依里が手がける『聴者を演じるということ 序論』。ろうの役者である數見陽子、そしてデフリンピックで金メダル2個、銀メダル1個を獲得した陸上選手・山田真樹が「聴者（耳が聞こえる人）」を演じることで、マジョリティである聴者の身体性や、社会における「ろう者／聴者」の非対称性を問い直すプロジェクトです。

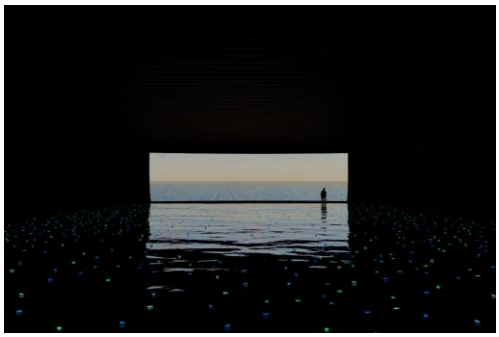
観客は今まで「個人」とされてきた「聴者」がカテゴリーで括られることを目撃する。演じる人はろう者役者の數見陽子と山田真樹。ろう者の身体で演じられる「聴者」に、私たちはどこまで言及することができるのか。演じる者と演じられる者、その関係を超越し、分かち合うことは可能なのか。（公式作品解説より）

「クリエイティブ・ウェルビーイング」への芸術文化のかかわり方を、アート作品や国内外の取組み事例として紹介

ギャラリー（展示）

10月28日（水）午後から11月1日（日）の5日間、ロビーギャラリーでは「展示」を行い、本会議のテーマ「Moving Together　ともに生きる文化」と呼応するアーティストの作品や、東京都、東京都歴史文化財団の取組み事例を紹介します。

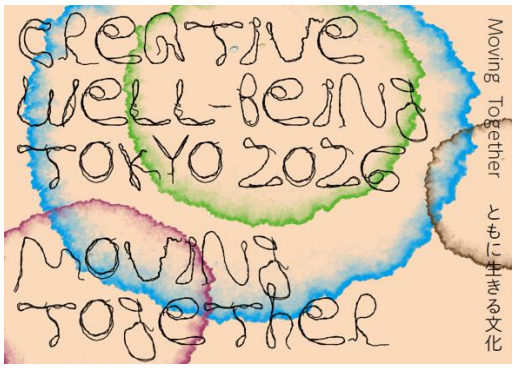
宮島達男をはじめ、クリスティン・ウォン・ヤップ、ジュマナ・エミル・アブード、小森はるか＋瀬尾夏美、是恒さくら、サンギータ・ジョギ、碓井ゆいと青木彬などによる作品・プロジェクトを紹介します。
震災の記憶、平和への願い、土地に根ざした営み、誰かとともに在ることの感覚に触れながら、来場者は「ウェルビーイング」を個人の内側だけでなく、人や社会、自然との関係のなかで捉え直していきます。詳細は、8月下旬に発表予定。



画像：「時の海 東北 美術館」コンセプトイメージ ©ATTA - Atelier Tsuyoshi Tane Architects

偶然のにじみと、つるで編まれた文字が描く「Moving Together　ともに生きる文化」

キービジュアルに使用した「Bleed」と「Clementite」について



キービジュアルには、インクのにじみから生まれたグラフィック素材「Bleed（にじみ）」と、野生のクレマチスのつるで形づくられた書体「Clementite（クレメンタイト）」を使用しています。

「Bleed」は、デザイナーの樋口舞子が、印刷された紙の上に落ちた水滴によってインクがにじむ様子に着目し、偶然生まれた波紋のような模様をグラフィック素材として展開したものです。
一方「Clementite」は、スイスの精神科病院マレヴォーズで行われたワークショップから生まれた書体です。アーティストのフランソワ・デイが患者たちとともに病院周辺の庭園や森を歩き、野生のクレマチスを見つけ、そのつるを編み込み、曲げながら、アルファベットの形をつくりました。

じんわりと滲む複数の波紋のような「Bleed」は、重なったり離れたりと雲のような動きと広がりを感じさせ、植物のつると格闘しながら、人々がともに身体を動かし創作した「Clementite」は、生命力と躍動を感じさせます。この二つを掛け合わせたキービジュアルは、人と人、人と自然、異なる存在が出会い、影響し合いながら新たな形を生み出していくプロセスを表しています。そして、本会議のテーマ「Moving Together　ともに生きる文化」と響き合うビジュアルとして、芸術文化を通じてともに考え、ともに動き、新たな関係性を編み上げていく姿勢を象徴しています。

日常のなかで生まれたものを美しいと感じ、小さな変化にも気づく。
そのような感性をもって生きることこそ、クリエイティブ・ウェルビーイングだと考えます。

画像： Clementite（出典：Silly Type Foundry 公式ウェブサイト　https://sillytypefoundry.com/types/clementite/）

○本リリースに関するお問い合わせ

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
広報担当：関次、柳生
TEL：03-6256-8432　/　E-mail：press@artscouncil-tokyo.jp

○本事業に関するお問い合わせ

公益財団法人東京都歴史文化財団　アーツカウンシル東京
事業部　事業調整課　社会共生担当
E-mail：info-cwt@artscouncil-tokyo.jp